

やすだのぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたときのお 親鸞聖人の 立身



イラスト 中川 学

親鸞聖人の「正信偈」、3回目です。

お寺に行くと、よく一緒に唱える「帰命無量寿如来(き・みよ・む・りよう・じゆ・によ・らい)南無不思議光(な・む・ふ・か・し・ぎ・こう)」というお経、あれが「正信偈」です。

もっと、光を！

もつとで修業をされていきました。そして、さまざまな仏さまが作られた、さまざまな浄土と、そこに

住む人たちの善悪をすべてご覧になり、「私は完璧な、そして最高の浄土を作りたい」という願いを立てられました。

そして、どんな浄土にしたらいいかを、びっくりするほどの長い時間、考えに考えに考え抜き、そしてすべての人にこの浄土のことを知ってもらおうとさらなる誓いも立てられました。

「正信偈」の次はこのようになっています。まずは本文です。今回は2行目までを読みます。

- 普放無量無辺光
- 無碍無对光炎王
- 清浄歓喜智慧光
- 不断難思無称光
- 超日月光照塵刹
- 一切群生蒙光照

一読すると「光」という文字が多く使われていることに気づくと思います。ここに書かれるのはす

べて阿弥陀さまのお名前、「光」が付く別名です。しかも十二個もあります。すごいでしょ。

これはさまざまなお弟子さん（といつても菩薩様？）が、「自分には阿弥陀さまはこう見えたよ」というのを書いたのではないかと、勝手に思っています。

阿弥陀さまは十二の光の異名を持つ仏さまなのです。

では、十二のお名前を最初にご紹介しておきましょう。

- (一) 無量光
- (二) 無辺光
- (三) 無碍光
- (四) 无对光
- (五) 光炎王光
- (六) 清浄光
- (七) 歓喜光
- (八) 智慧光
- (九) 不断光
- (十) 難思光
- (十一) 無称光
- (十二) 超日月光

では、次にこれらのお名前、ひとつひとつを見

ていきましょう。

▼量りきれない光

(一) 無量光

一番目の「無量光」の「量」とは「はかる」と読みます。ですから「無量光」とは、「量(はか)ることができないほどの光という意味です。阿弥陀さまは、そんなはかり知れない光で私たちを照らして下さいなのです。

阿弥陀さまのことを「無量寿如来」とか「無量寿仏」ともいいます。こちら「量(はか)れないほどの長い寿命」の仏さまという意味です。

「無量寿」を昔のインドのことばであるサンスクリット語では「アミターユス」といい、この「アミター」が「阿弥陀」になります。

ちなみにサンスクリット語は英語などに近い言語で「アミター」の「ア」は否定語(くない)、そして「ミター」は英語のメーターと同じで「はかる」ことを意味します。

これは次の無碍光と一緒に見ていきましょう。

あ、ちなみについて「旦那」というのもサンスクリット語で、もとは「ダーナ」で、お布施や、お布施をくれる人を意味します。ですから、給料をくれる人も旦那といい、またその給料を家に持つて来る人も旦那というようになりました。

旦那から「俺はただのATMか」と言われたら「はい、そうです」と答えればいいですし、家にお金を入れない夫は旦那ではありません(笑)。

さらにちなみにですが、臓器を提供する人を「ドナー」といいますが、これも語源は同じ「ダーナ」です。

(二) 無辺光

阿弥陀さまの光、二番目は「無辺光」です。「辺」とは「境」とか「限り」という意味です。阿弥陀さまの光には境もないし、限りもない。どこにいても届くのが阿弥陀さまの光なのです。

これは次の無碍光と一緒に見ていきましょう。

(三) 無碍光

無碍光の「碍」というのは妨げるという意味です。阿弥陀さまの光は、何ものにも妨げられることがない、それが無碍光です。

ふつうの光はいろいろなものに妨げられます。冬の日、せつかくばかほか暖かい日が射してきて、そこに建物があると遮られてしまいます。人に遮られることもあり、「邪魔だよ」と思ってしまう。

何万光年の彼方から、何万年の旅をして来た星の光だつて雲に遮られて届かないこともあります。無碍光でもあり、無碍光でもある阿弥陀さまの光は、どこにいても、どんなに遮るものがあつても私たちに照らして下さいます。多くの宗教では、救われないと思つたら何かをしなければならぬと教えます。たとえば、五戒や十戒という戒律を守らなければダメだという宗派もあります。

しかし、五戒の中のひとつ、「ウソをついてはいけない」なんて絶対守れませんか。「生まれてこのかたウソをついたことがない」なんて人がいたら、その人はたぶん大ウソつきか、自分がウソをついている自覚がないサイコパスです。

あるいは、財産すべてを上納しなければならぬとか、壺を買わなければならぬなどという宗教もあります。

しかし、阿弥陀さまはそんなことは言いません。誰だつて、そしてそれがどこにいる人だつて差別はしません。阿弥陀さまの光は誰にでも届き、そして救つて下さるのです。

▼光るお姫さま

この「無碍光」、「無碍光」で思い出すのはかくや姫です。

かくや姫のお話は平安時代の古典『竹取物語』に書かれます。

ある日、野山に入って竹を取つていたお爺さん、

根本が光る竹を見つけた。不思議に思つて中を見ると、竹の中に小さな女の子を見つけた。その子を籠に入れて家に連れて帰り、育てます。

その日から黄金が入つていける竹を見つけたことが重なり、お爺さんとお婆さんはだんだんお金持ちになつていききました。女の子はどんどん成長し、成人しましたが、お爺さんはこの子を几帳ちやうの中から出すことはせずに、大切に育てました。

文字通りの「箱入り娘」です。

しかし、この子には不思議なところがありました。からだから光を発するのです。しかも、家のどこにも彼女の光が届き、暗いところがひとつもないほどなのです。まるで阿弥陀さまの無碍光・無碍光です。

しかも、どんなに気持ちが悪く落ち込んでいても、あるいははからだの調子が悪いときでも、この子を見ると苦しい気持ちもふと消えてしまうし、

腹立たしいことがあつてもそれも消えてしまうのです。

ちなみに『源氏物語』の主人公である光源氏もそうです。イギリスの東洋学者であるアーサー・ウエイリーは、光源氏のことを「シャイニング・プリンス」と訳しました。まさに光輝く皇子なのです。そして、どんなに彼を嫌っている人でも、その光に接してしまうと嫌いと通すことができないと書かれています。

これは七番目の「歓喜光」とも関連します。

▼最高の光

この「無碍光」が含まれる「正信偈」の句は「無碍無対光炎王」です。

無碍光だけでなく、(四)「無対光」と(五)「光炎王光」も、この句に含まれますので、このふたつも見てください。

(四) 無対光

四番目の「無対光(むたいこう)」。これは、阿

弥陀様の光には対抗するものがないということです。

私たちは「光」にも差をつけています。明るい光もあれば、暗い光もあります。

これは光そのものの明るさもありますが、同じ光でも人によって、それをどう受け取るかの違いもあります。

ゲーテの最後の言葉は「もつと光を！」。だつたと言われていますが、年を取ると目が弱くなり、テレビでもパソコンでも明るくないと見えなくなります。弱い光に接すると「もつと光を！」と言いたくなります。

しかし、阿弥陀さまの光はそんな言葉が必要としないほどのキラッキラの光なのです。

どんな人にも明るい光、それが無対光です。

(五) 光炎王光

五番目の「光炎王光」は、あるいは「炎王光」ともいいます。

ここではじめて「炎」

という文字が現れました。この光はただ輝くだけでなく炎の光、すなわちものを焼く光です。

酒や賭博など自分の悪癖がやめられない。「やめよう、やめよう」と思つても、また手を出してしまふ。自分ではどうしようもできない。

そんな悪癖を焼き尽くしてほしいと思つてあります。阿弥陀さまの「光炎王光」は、そういうものを焼いてくれる光です。

また、地獄、餓鬼、畜生という暗闇をも照らし、救つて下さる光でもあるのです。

今回は十二の光のうち五つの光を紹介しました。今年もいろいろありました。「もつと光を！」と思うような出来事もありました。

今年こそは阿弥陀さまの光で、もつと明るい年になればいいと思つています。

みなさま、よいお年をお迎えくださいませ!